ウータン

〈HUTAN〉
森の通信

一部 100円
年会費 2,000円
郵便振替 大阪3-3880

第16号

●1990年 8月 6日 発行

ウータン・森と生活を考える会
〒530/大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館#308
Tel.(06)372-1561「自然を返せ/関西市民連合」事務所気付

◆アマゾンからの報告 ベンジャミン・ワッパリア族長の訴え!

◆稲葉一郎(フリージャーナリスト)「ワッパリア族長講演同行記」 ◆公開質問状 返答報告

アマゾンの熱帯雨林を守れ!

●アマゾンはこのままでは全て破壊されてしまい、我々も絶滅するだろう。そうなれば、世界も崩壊するだろう―。●

「日本人に訴えます。我々を助けて下さい！」

ベンジャミン・ワッパリア族長
〈9/1 花博での講演より〉

最初に私を日本に招いていただいた稲葉さんや多くの方々に感謝の意を表します。

これから私がアマゾンの生活の現状と環境問題について、若干の説明をさせていただきますが、その内容に細かく言及する前に、私の方に注目し私の話を注意深く聞いて下さい。

私たちアマゾンのインディオたちは白人と接触する以前、森や河、魚、果物、狩猟、私たちの全ての産物の中で戦争もなく平和に暮してきたのです。又、インディオたちにはマラリヤや風邪といった疫病なども存在しなかった。

私の部族、シャバンテも同様に白人たちが入植し、シャバンテ族と接触して以来いろいろな病気や悪影響が及ぼされてきました。

その悪影響の最たるものにタバコを吸うことだとか、アルコールを飲むといった人間の体内を蝕むような要素を与えたことです。白人たちが入植するまでは、インディオは独特の文化（食べ物をはじめ物理的、内面的な要素を含む）というものが保持されてきた訳ですが、白人たちによってもたらされたタバコ・アルコール・お金・病気あらゆる物で、私たちの一番大切とする生活や文化が犯され、壊され、今日に至っているのです。

白人たちがもたらした影響の中で、特に病気によって今なお非常に多くのインディオの子どもや老人が死んでいます。その数も年々増えつづけています。

それは、ブラジル政府の援助の不足にも

●ベンジャミン・ワッパリア（44才、シャバンテ族族長、マットグロッソ州 アルテイラ・サンペドロ在）

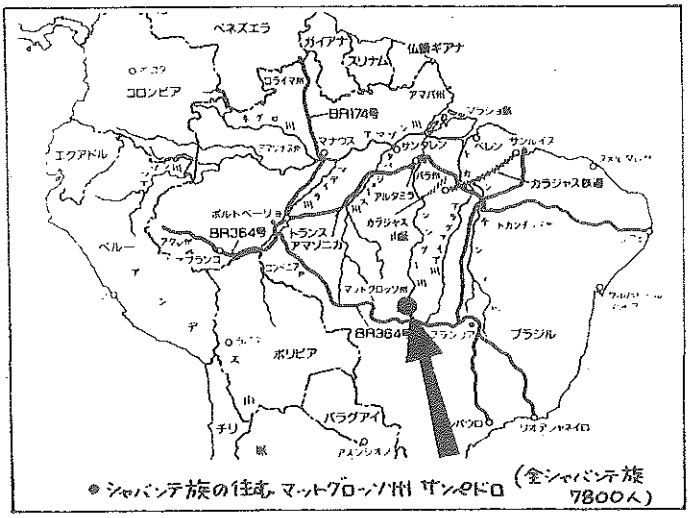
◀今や、この村に入るには道路から牧場を横切らなければ入れないとのことです！

〈photo: 稲葉一郎〉

原因があります。

例えば、私たちの住んでいる所はアマゾンの地域ですから病人が出た時など村には治療施設がない為70km～100kmはなれた町に病人を運ばなくてはなりません。

しかし、村には車ひとつありませんので、そんな場合、近くの大農園主の車で運んでもらうんですが、あまりに遠隔地であるために治療がおくれ、その結果死傷者が多く出ているし、助かる人も助からないことが日常茶飯時です。



このように奥地には治療施設、管理施設がない、又治療の為の薬物もない、人手もない、家の状態もよくない、何もない、ないないないの三拍子だというのが今のアマゾンです。

果して日本人の人々は近代化された中でどれほど私たちの状況を認識しておられるでしょうか。

殺りくも行なわれたし、破壊も行なわれた。川はひどく汚れ、魚も死んだ。

とにかく食べ物、果物、森や川、全てが汚染されていった。それもこれも白人たちの手によってです。その中には金塊り人(ガリンペイロ)も含まれています。

以上のような事は全て、白人たちとの接触の後に起ったもので、それ以前には私は一度も経験した事がありません。

私のこの強調からもおわかりのように、白人たちがやってきて悪影響を及ぼした結果が今のアマゾンの状況につながっているのです。

白人たちの搾取というものは単に文化のみならず物理的な要素、例えば魚や獲物をとること等の食料の問題にまで及んでいます。

インディオたちは以前は平和に暮していたし白人の家を襲ったり、攻撃をしかけたこともありません。にもかかわらずなぜ白人たちはインディオを攻撃し、侵略をするのか私は疑問に思います。

インディオたちは白人に対して嫌悪の念をもっているのではなく、むしろ尊敬の念をもっています。しかし白人たちはインディオに対して尊敬の念を持っていないばかりか、何の興味すら示さなかったのです。

そのことに自分たちはつくづく嫌気がさしています。

白人たちはアマゾンから我々インディオがいなくなれば《自分たちの世界》が構築できるんじゃないかということを考えていると私は思います。

とにかくインディオたちというのは白人たちの手中にある、というのが現在の状態な

のであって私が強く願望するのはインディオたちが独立した一つの形となって現われることです。

私は、インディオですが、そのインディオの血というものは混血でいろんな部族の血がまじっています。そして一つの族をなし一つの集落に住むようになった。

私はその共同社会の中で暮している一つの族の族長となったのであります。

私たちインディオは、色々な部族がいるにもかかわらず全てが兄弟関係であって非常に友好的なかたちを保っているのです。

もしも将来的に白人とか企業主、経済的に裕福な外国人たちがインディオたちに戦争や斗い(内面、外面的なものを含めて)をしかけて来たならば、私たちはインディオの部族として自分たちの自然や環境を守るために立ち上がらなければならないと強く決意しております。

アマゾンの破壊は、全世界の破滅につながっていくだろう

前世紀、非常に多くの日本人たちが移民としてブラジルに入植して以来、ブラジルと日本の関係が密接になってきました。

だからこそ私はブラジル人として日本人の方々にブラジルの今の現状を再度お話ししたいと思います。

私はあなた方に言いたいんですけど、アマゾンで実際行なわれている迫害の問題や人種、文化の問題は単に口頭でもって伝えられる問題ではなく、非常に根が深いものであることをみなさんに認識していただきたいのです。

たとえば、アマゾンの森林の問題について考えるならば白人たちの入植以来、多くの建造物(ダムなど)だとかがインディオたちの食料などにいろんな影響を与えてきた。

以前の自然という源をもったものがどんどん破壊されていっている中で、今後インディオ部族はどのように生きていったらいいのだろうか。

又、今やアマゾンの森林破壊の問題は単に自分たちの部族だけの問題でなく世界の問題にまで波及していってます。

私はブラジルという遠い国からこの問題を日本の皆さんにわかっていただくためにやって来たのです。

今まで私がのべたことは、色々な意味で国際的に重要な問題となっており、インディオたちの中で解決できるものではありません。国際間の人々の協力と援助が必要なのです。

▲ ヤノマモ族(ブラジル最北端のアマゾンからベネズエラにかけて居住する。)

開発によってアマゾンの森林が消えていくように先住民族も消滅の道をたどっている。一九〇〇年ごろ、百万人いたという先住民は今では、二〇数万人に激減し、既に一人残らず消えた部族も多。

私たちは日本に援助を求めていますが、単に物理的な援助を求めているのではなくて、心理的、内面的な援助を求めているのです。

もし、日本が経済的なもので企業主、農園主たちにお金を貸すならば、彼らというものはアマゾンの中で搾取をくり返し、それは逆にインディオたちの生活をおびやかすことになり、しいては全世界の破滅にもつながっていくことになりましょう。

私たちの状況は非常にきびしく深刻です。どうぞ、私たちを助けてください！

日本の人々の熱烈な、そしてまじめな援助というものを強く心から願うものです。

（会場拍手）

●この後、会場での質問にワッピリア族長が答えられた。

――FUNAI（インディオ保護局）はインディオの役に立っているのでしょうか？

FUNAIはインディオを保護するためにつくられた団体で、ブラジルでも有名であり重要な問題となっています。

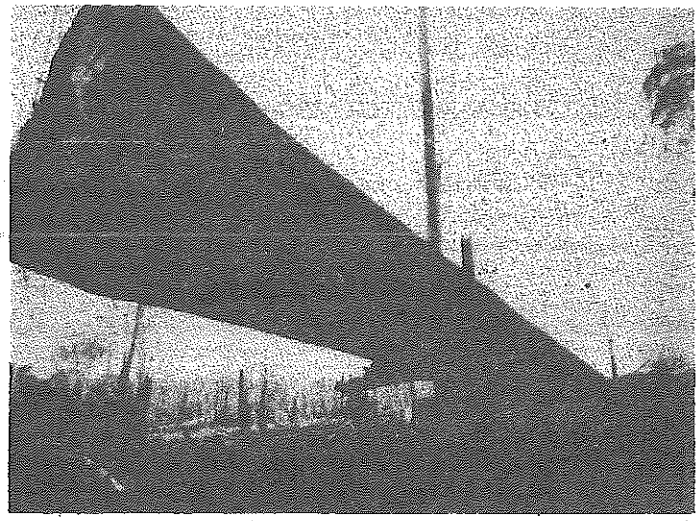
今から私は、その内実をお話をしたいー。今日まで多くの外国人たちがインディオを保護するためにFUNAIに対して非常に多くの資金援助をしています。

しかし実際は、その逆であって金銭的な援助はされているものの、FUNAIはインディオたちに実質的に、経済的な援助はしていません。

要するにヨーロッパなどから寄付、投資といった資金が援助されるんですけれどもインディオたちの文化もしくは保護、環境には役立っていないのです。

FUNAIが援助している資金というものは、金銀を搾取する者や企業主、農場主など俗にいう上流社会の人たちに付与されているんであって、我々インディオには与えられていません。

したがって現状は資金を援助されているにもかかわらず逆にインディオの生活を苦しめているというのが本当のところです。



▲焼きつくされるアマゾンの森（ロンドニア州、アリケメスでー）

●FUNAI（連邦インディオ保護局）

ブラジルでは、インディオの問題はFUNAIによって取り扱われてきている。FUNAIはインディオ保護の為に有効な機能を果たしてきていないばかりか、反対にインディオ社会を破壊する役割さえ果してきた。

追「NATURE」Vol.345（'90.6.28）によれば、1989年後半の時点でアマゾンの森林消滅面積は404,000km²（熱帯雨林の10.9%）に達したそうです。――

特にインディオの居住地域の境界画定について何ら積極的な姿勢を示してきていない。　その根本的な原因は、FUNAーがインディオ社会の文化的多様性を尊重することに関心があるのではなく、ブラジル政府の進める「統合」政策の実施機関であるという点にある。

そのいい例が、'82年に世銀とEEC（欧州経済共同体）が融資した「インディオ社会支援プログラム」1360万ドルがFUNAーによって、インディオの伝統的な社会を維持する目的、つまり先住民の利益の為には使われず、その資金はFUNAーの地方拠点の運営経費や私的目的の為に流用したのである。

もう一方では、インディオ社会に貨幣経済を持ち込み資本に依拠した労働・生産制度を促進してきているのである。　こうして「インディオ社会支援プログラム」は何らインディオの為に使われないまま5年間の有効期間をもって'87年に終了した。

又、ベンジャミン・ワッパリア族長は、'89年2月、アルタミラ・シングー集会の後、政府とFUNAーから「一人で町に出かけてきた時に殺す！」と脅迫を受けたそうである。

▲ガリンペイロ（金堀り人）たちによって破壊された森。

●ガリンペイロ（金堀り人）

アマゾンには、金・銀・ダイヤモンド・マンガン・鉄鉱石などが埋蔵する。パラ州イタイツーバ、ロンドニア州、リオマデラなどで金堀りブームになっており、金の選別に使われる大量の水銀が大地や川にたれ流され、アマゾンの自然を水銀で汚染し大きな問題になっている。　パラ州アルトボニートでは水俣病と同じ水銀患者まで発生している。

――ワッパリア族長の訴えに思う――

今、こうしている間にも、アマゾンや東南アジアの熱帯林が破壊されている。

熱帯林の世界最大の浪費国日本に生きる私たち日本人は何をするべきか。

ワッパリア族長の訴えに、「日本の印象は？、日本の食べ物は何が好きか？」などと質問をする会場に集った150人ほどの日本人は、ワッパリア族長の目にどう写ったのだろう。　ワッパリア族長を単にアマゾンからの友好大使とでも思っているのでしょうか。　日本の愚行や、浪費生活を返りみずこのままずるずるなら私たちは熱帯林の破壊者になり下ってしまうことになろう。

（永田健一）

●講演同行記●

ワッパリア族長の目に日本は本当に『イルマオ』（兄弟）に見えたのだろうか。

稲葉一郎（ジャーナリスト）

稲葉さんは、これまで5回に渡りアマゾンを取材され、その熱帯林破壊を写真で訴えてこられています。今回のワッパリア族長の来日講演も氏の働きかけによるものです。20日間に及ぶ講演ツアーに同行された中でのコメントをいただきました。尚、朝日新聞社より「アマゾン発熱帯林破壊報告」が出版されています。

日本人は、我々シャバンテ族とは「イルマオ」（兄弟）だ――――。ブラジルのアマゾン興地からはるばる日本にやってきて「アマゾン熱帯林破壊の実情」を訴えたシャバンテ族のワッパリア族長(44)の目に、日本は本当に兄弟に見えたのだろうか。

熱帯林の木材輸入浪費国、日本に住む「日本人」は確かに肌の色、顔つきなどはシャバンテの人々とよく似ている。人類学的にも両者はモンゴロイドとされ、ルーツをたどれば兄弟だろうが、決定的に異るのは熱帯林へのかかわり方である。

シャバンテの人々はアマゾンの森と共存、というより森の自然に抱かれ、恵みを受けて何万年もの間生きてきた。今でもその生活態様は変らない。太陽や水、大地を母とするデイミテ(神)の摂理の下に生きている。川の魚はデイミテであり、森の中の果実もデイミテである。シャバンテの人々に命を授ける自然は類なき味方である。

「自然は我々の味方である。その味方を破壊したり、搾取したりしてはいけない。」と、ワッパリア族長はいう。

これに対し、ニッポン族の人々はどこに位置するか。シャバンテ族とは対極の中心部にいる。東南アジアの熱帯林を思うがままに伐り倒し、運び、浪費に浪費を重ねる原木漁猟をし日に森をむさぼり続けている。慢性飢餓症の重病人である。このままでは早晩、アマゾンの森に魔手をのばすのは必定。いやもう魔の手はのびている。「アマゾンの森を破壊するな――！」という叫び声を世界に向けて放った1989年2月のアルタミラでの「インディオ、シングー集会」の直後にアマゾン河口の町、パラ州ベレンにはアマゾンの木材を物色しに日本から視察のグループが徘徊している姿があった。

●アマゾン熱帯林はすでにニッポン族のターゲットにある

シャバンテ族をはじめとするアマゾン先住民の生命の地である熱帯林をうかがう資源浪費国の本陣にやってきたワッパリア族長はどこでも「人気」だった。「熱帯林保護」を叫ぶ人たちからは拍手で迎えられた。

TVの電波にものった。アマゾンの「シングー川」と同じ名前の市にも招かれた。

大阪の花博会場でもアマゾンの危機の声の一石を投じた。高校やロータリークラブでも講演会が催された。ある町では有志が集まってワッパリア族長に日本の踊りや「赤とんぼ」の歌を聞かせてくれた。

20日間の滞在だったが、ときには「アマ

ゾン・インディオ尊長」という人寄せパンダ的な立場に立たされたり、賜役を甘受させられたりもした。

森の破壊で部族の苦しい生活のためにトラックが欲しい――という族長の悲願に対し「インディオには、トラックは必要ないのでは。トラックが来れば森がもっと破壊され、生活も変わる。そういうものをインディオが欲しがるのはおかしい。」という若い女性は日本の重汚水を知らないらしく、インディオはアマゾンの森の中で「文明」と無関係に暮していればそれでいい、と考えているらしかった。

また――「アマゾンの森林破壊は分かったが、では我々は何をすればいいのか教えてもらいたい。」という声はどこでも聞かれた。

世界最大の熱帯林の木材浪費国として、熱帯林破壊の加害国の国民がこうしたことをアマゾン先住民に聞かなければならないのだろうか。

熱帯林保護を機関紙で高らかに唱えるある新興宗教を訪ずれ、教祖にアマゾンの実情を訴え、先住民に対する理解と協力を求めたところ、ただうなずくだけでなんの同情も得られなかった。

ワッパリア族長は徹夜で車にゆられ、贅をつくした神さまの建物を見ていただけに、帰りの車中ではがっくり疲れていた。

「キリスト教のローマ法王にも会ったが、なにもしてくれなかった。」

「宗教はどこも同じだな――。」というのがワッパリア族長の得た結論だった。

ワッパリア族長は日本の土産話として部族の人にどんなことを話すのだろうか。

(photo. 稲葉一郎)

●アマゾンの森を守るために我々に協力してほしい――と訴える、アマゾン先住民シャパンテ族ワッパリア族長（'90.7月1日、花博会場のムビ村で）

46/29 毎日

「新宮」―「シンガポール」に架け橋

「アマゾンを守って」

講演後、「友情のしるし」と田岡工業・新宮市長に弓矢を贈るワッパリアさん（右）―新宮地域職業訓練センターで

シャパンテ族族長が訴える

熱帯林の乱伐で自然破壊が進む、ブラジル・アマゾン川支流のシンガー川流域に住む先住民族、シャパンテ族のベンジャミン・ワッパリア族長ら三人が二十八日、同じ熱帯の新宮市（和歌山県）の田岡工業新宮市に招かれ、市内で講演。約四百人の市民にアマゾンの森林破壊の現状と自然保護を訴えた。

ワッパリアさんは「文明人と接触する前で、原生林、純いろいろな観光が豊かで、病気もなかった。ところが、開発のため乱伐が続き、川も汚されたブラジルは貧乏で、ヨーロッパや日本の助けがないと生きていけない。日本はもっとこれ以上、開発のためのお金を貸さないでください。熱帯林を守っている以私たちインディオです。日本の皆さん、インディオに力を貸して」と呼びかけた。

シャパンテ族はブラジル中央部のマットグロッソ州内に住むが、資源開発や道路建設、鉱山開発などで次々に自然が破壊され、一九〇〇年ごろに現べ約四万の一の約八千人に減ったという。

'90・6・25

サラワク先住民への不当判決を許すな！

生林を使用する権利はないのか…?!

〜マレーシア地球の友より〜

この四月、サラワク州ウマ・バワン村協議会議長ジョクさんは言う。

「樹木の伐採、搬出は、熱帯林の自然環境、生態系を著しく破壊する。商品とする樹を切り倒す時には、必ず周囲の多くの樹木を薙ぎ倒す。また、木材を運び出すためにつけた道路も無茶苦茶に熱帯林を壊している。

木材伐採業者は選択伐採だから原生林を壊さないと言うが、伐採によって、我々の先祖を含めて我々が使ってきた森はことごとく破壊された。サラワク・プレイウッド社は、我々カヤン族が権利を持つ土地の原生林まで破壊した。その上、我々が使って来た森に、彼等は勝手に道路をつけた。だから、我々は告発したのだ!!」

三月二六、二七日、サラワク州クチン高等裁判所で、ウマ・バワン村のカヤン族の他プナン族の代表者など五〇名程がつめかけた中で、初めて先住民がサラワク州政府、伐採企業、ライセンスを持つ企業を告発する裁判が開かれた。

しかし、クチン高裁の裁判官は、何を血迷ったのか「ウマ・バワンのカヤン族が彼等の森林の権利を侵害されたと訴えたことに対して、彼等は異議を申し立てることは出来ない。また、彼等が彼等の慣習的利用の権利のある土地で許可された伐採権の有効性に対しても異議を申し立てられない」という不当判決を六月二五日に下した。その理由

・丸紅　代表取締役・龍野富雄
木材建材部　TEL 06(266)4455
FAX 06(266)3997

・ニチメン　代表取締役・田中義己
木材部　TEL 06(223)4491〜3
FAX 06(223)4500

FAX IN! 送付例

代表取締役

私達の公開質問に応えようとしない貴社の姿勢に失望する。
アジアの各国の森を壊し、熱帯林の再生事業を行わないのか。切って輸入して、儲けるだけなのか。これではますます日本が問われることになる。

先住民の暮らしを破壊して、このまま企業活動を続けることは許されないことだ。直ちに、貴社も破壊した森の再生事業に取り組むべきだ。このままでは、ますます姿勢を問われることになるだろう。

私達は、熱帯林の破壊を止めるまで警告しつづける。

熱帯林の破壊をやめよ！

先住民への弾圧になる事業をやめよ！

署名＿＿＿＿＿＿＿＿

は、「先住民が提訴した告訴は、期日を既に過ぎている。マレーシアの法の下では、政府の行政行為に対する訴訟は、三年以内の期日に提訴すべきというもので、期日を経過している」という内容だ。だが、カヤン族が長らく使用してきた原生林を、〝保護林〟に指定したサラワク土地法は英国植民地政府下の布告で、一九五八年に作られたのだ。

この判決に対して、先住民は「我々の長老はその布告が出された時に、この布告の意味を十分知りはしなかった」と述べた。次いで、「長老たちは〝保護林〟とは、先住民の共同体にとって必要なものを維持するための、そして保存または保護するものと信じていた」と主張した。先住民達が、当時の土地法「改正」を知り得ないことは明らかだ。またジョグさんも「第二次大戦後、企業が勝手に伐採可能地として地図に入れたのだ。我々は伐採認可を全く知らされていない」と言う。

加えて、告訴を却下した裁判官は、「この裁判における原生林に対する伐採許可は、訴訟を係属出来ないから法的に有効であり、従って先住民が慣習的に使用して来た土地を通す伐採道路もまた、伐採企業によって合法的に作られた」と、時代錯誤の判断を下した。これでは先住民は慣習地に対する権利と原生林への権利を持てないというものである。

一九五八年のサラワク土地法は、部族間の境界を描いた地図をイギリス政府が保管し、その内容は、五八年一月一日以前に先住民が、①原生林を開拓して占有した土地、②果樹栽培地、③占有地及び耕作地、④墓地及び聖地として使用した土地、⑤通行のための土地、⑥その他合法的に使用している土地、については先住慣習地として認めている。この土地の使用について、①、③、④、⑤、⑥の項目については既にカヤン族が利用し、権利を持っている。判決はこれらに該当すべきものであるにもかかわらず、一切無視したもので、サラワク土地法に相反する違法のものであるのは明らかだ。今ごろになって「先住民の提訴が一定の期間（三年以内）を経過している」ことをもち出す判決は、加害者である政府、伐採企業に加担するものと言えよう。先住民が慣習地として使用して来た土地に、伐採企業が勝手に伐採道路を通すことは、どこに合法的な根拠があるのだろうか----？

この判決公判のために、州都クチンまで行った先住民の多くは、この結果を聞いて呆然としてしまった。という。先住民の権利はどこにあるのか。先住民自身の〝個人的財産を保持〟することも出来ない、共同体としての権利も無いというのか!!勝手に伐採する企業はどこに合法性があると言えるのか!! 先住民の怒りはおさまるはずがない。

これからこの判決に対して、ウマ・バワンのカヤン族の人々はマレーシアの最高裁へ上告し、サラワク高裁の判決の不当性を全世界に告発するであろう。

（文責・西岡良夫）

10月に渡航予定

最高裁上告へカンパを

ボルネオ島奥地からマレーシア最高裁（クアラルンプール）まで上告しに行くのに、多大な費用がかかります。金銭経費外に暮らす彼等は、ほとんど金がありません。是非カンパを!!

・HUTAN ACTION REPORT・

公開質問状 返答報告

●私たちウータンは、サラワクの先住民たちの叫びにこたえるためにろ月以降、熱帯材を輸入する日本商社数社に申し入れを行ってきました。　更に6月、商社、企業10社（日商岩井・住友林業・住友商事・ニチメン・トーメン・丸紅・三菱商事・兼松・伊藤忠・明和産業）に対して6項目の公開質問状を送り、6日末までにその回答を求めました。

しかし、回答があったのはこの内4社にとどまり、又その回答も全く話にならないものもありました。　以下に、これらの回答を載せておきますが、日本商社といわれるものがどれほど欺瞞にみちたものか、おわかりになると思います。

では、はじまり〜〜。

▼「公開質問状」内容

一）今後のサラワク州からの木材輸入計画をしめして欲しい。
二）サラワク州の先住民が森を壊され、やむなく伐採道路の封鎖をして遠征されたり、弾圧を受けています。貴社は、このことについて直接的にしろ間接的にしろ伐採・輸入行為と関わりがないと考えるのですか。
三）フィリピンなどにおいて森林の大量伐採をして、サラワクでも木材の大量輸入を続ける貴社は、いつから、どこで、どのような森林再生計画を行ってきたのですか。また、多種多様の熱帯林の再生は可能と考えますか。具体的に回答してほしい。
四）貴社は、今後どのようにすれば熱帯林の破壊を防げると考えるのですか。
五）サラワクで乱伐によって森が破壊されてしまうと、貴社は今後どこから熱帯木材の輸入をしようと計画しているのですか。
六）貴社は、社内で紙の節約運動、リサイクル運動をどのようにしていますか。

●日商岩井編

日商岩井には、サラワク州ウマ・バワン協議会議長のジョグ・ジョワ・イボン氏が来日した際に申し入れを行ったのである。　ジョグ氏は、日商岩井にくり返しサラワクからの熱帯材輸入をストップしてほしいと訴えたが、「我々はパプアニューギニアで植林事業を開始しているとの一点ばりで、私たちの抗議をノラリクラリと逃げ回っていました。　その他、何ら具体的回答とないまま会談は終了しました。　何を言れんや、その会談で十分だろうと今回の公開質問状を送りましてしまったのである！　これで済むと思うな日商さんよ！

NISSHO IWAI

日商岩井株式会社
〒541 大阪市中央区今橋2丁目5番8号
テレ　ウス・522・2805・(ROC)
電話・大阪 051203-

"ウータン　森と生活を考える会"

代表　西岡　良夫　殿

平成2年6月25日

6月6日付　弊社代表取締役字式章二宛貴書に関し、実務を担当しております本材部より下記回答申し上げます。

本件は本年3月14日に、貴殿をはじめとする諸団体、弁護士等々、多数の方々と弊社会議室に於て、約1時間半に亘り面談させて頂き、パプア・ニューギニア国に於ける弊社の植林事業の推移等、弊社が環境問題に対し充分留意している事、ご説明申し上げた通りで、その後もいささかの変更もございません。

以上簡単ではございますが本件の回答とさせて頂き度くご了承願います。

日商岩井株式会社
大阪木材部長
近藤　栄二

▶たった、これ一枚ですよ！バカにスルナ！

●日商岩井の植林事業の内実は、

日商岩井は、JICAから「環境協力」として供与される融資を見込み、パプアニューギニア・ニューブリテン島において試験的造林事業をしてはいるが、これに先立って同社は75%出資して設立された現地合弁会社ステッティン・ベイ・ランバー社を使い、大規模な森林伐採を行っている。

●三菱商事編

三菱商事は今年四月一日、「地球環境室」を設立した。
「国内外の投資家へのアピールのためにも地球環境問題への取り組みを企業ポリシーとしていく。」と室長・中恭助はいう。
まさに、環境ビジネスとして「バスに乗り遅れるな！」と言ったところだ。

1990年6月27日

三菱商事株式会社
地球環境室
室長　守　恭助

拝啓
時下益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。
熱帯雨林問題に関する貴信拝受致しました。
私共、三菱商事は、かねてより「環境への配慮」を行動基準として、経済活動と環境保全との調和共存を重視して参りました。
本年4月、全社的な環境秩序の更なる推進を目指し、地球環境室を新たに設置し、地球環境諸問題に真剣に取り組んでおります。
弊社に対する熱帯林伐採に関しての御批判を頂いておりますが、事実を踏まえ、次の通り御説明申し上げますので、皆様のご理解を頂きます様お願い申し上げます。

ＦＡＯ（国連食料農業機関）の最近の調査報告書によりますと、1986年に東南アジアで伐採されました南洋材の数量は 644百万㎥であり、内約12百万㎥、全体の約２％が日本に輸出され、残りの大半は生産国で薪炭等を含む国内需要に消費されております。
また、日本木材輸入協会の統計によれば、昨年（1989年）日本への南洋材輸入総量は12.6百万㎥で、内サラワクからは、6.7 百万㎥となっております。
弊社においての南洋材輸入量につきましては、昨年度は、25万㎥、総量の約2%で、日本の商社中14位、サラワク材のみについて申し上げますと、18万㎥、11位となっており、日本の総輸入量の中の極く一部を占めているに過ぎません。

Ⓐ

熱帯木材生産国での森林減少の大きな要因には、現地住民による焼畑農業・入植による開墾があります。これは、途上国の爆発的な人口増による過度の開墾のためであり、木材を売るためのものではなく生活を守る為によるものです。また、私共は決して伐採のために現地住民を迫害する様な行為を行っておりません。

Ⓑ

私共も次の世代の人々に好い生活環境を残していくため、地球環境保全に最善の努力を傾けることは、個人であれ、企業であれ、地球上の全人類に課された使命であると考え、下記諸活動に参画し、問題解決に向けて取り組んでおります。

(1) 日本木材輸入協会を通じ世界の熱帯雨林の再生を図る為、ITTOの活動に対し資金を拠出。日本政府は去る５月のITTO総会にて熱帯雨林再生の為の基金として、２千万ドルの拠出を決定
(2) サラワク政府及びその下部機関と協議の上、横浜国立大学と共同で同地に従来不可能とされる熱帯自然林の再生実験に着手
(3) 南洋材を材料としているものの代替材料の研究・開発
(4) 生産国政府と協力し、現地住民が熱帯雨林の破壊に頼ることなく生計を立てられる様、他産業にての雇用機会を創出
(5) 環境保全に関し、国内・海外の関係政府機関との協議の推進
(6) 植林技術の研究開発に携わる諸研究機関に対する寄附
(7) わが社全社的規模での再生紙活用の為のゴミ分別回収の実施

Ⓒ

私共は、以上述べました諸施策を含め、世界の良きコーポレート・シチズンとして国際企業の立場から、幅広い企業活動を通して環境保全に向けて、一つ一つ実行に移して参る所存でありますので、今後とも宜しくご支援下さいます様お願い申し上げます。

敬具

Ⓐ いみじくも「地球環境室」と名乗るところが、このような見解をどうどうと出してくるとは……。
少くとも、サラワクにおいては間違い。
伝統的焼畑農業は、長年の間、熱帯林の生態系に最も適した農耕法であり、又焼畑は主に二次林で行なわれ、危険と多大な労力を必要とする原生林の開墾は避けられていた。
入植者（土地なき貧民）の開墾による破壊は、奥地まで入りこんだ森林伐採道路が出きたからこそ、各地に広げってきたのです。

Ⓑ じゃあ、食べ物も薬草もなくなって、飢えや病気に苦しんでいるのは誰のせい！

Ⓒ 小さな親切、大きなお世話。
「熱帯雨林の破壊に頼」って「生計を立て」てるのはどっち?!
先住民の望んでいるのは自然と調和した、自立した生活を続けることで「他産業にての雇用」で賃金奴隷になることじゃないんよ！
国連の「先住民族の権利に関す

る世界宣言」をしっかり読んでね。
先住民の合意なしに、伝統的な生活地や資源を破壊するな。
民族的独自性を奪うな。とちゃんと書いてある。

Ⓓ 熱帯林再生実験について

"世界に先駆けて挑戦"とおっしゃいますが、フィリピンではすでに数年前より行なわれています。やってる人は「あと百年たってみないと結果はわからん。」というてるとか。
「サラワクの森は、あと5年で滅ぶ。」といわれています。
せめて、再生実験が成行するかどうか、わかるまで伐採を中止して下さい。（結果が出る頃には、あなた方も私たちもこの地上にはいないでしょう）
「自然林の再生」って長楽いいうけど、熱帯林はものすごおーく樹種が多いんですよ。複雑な生態学を再生するなんて果して可能なんですか？　どれほどのエネルギーや資金をつぎこむつもりですか？　たとえ「理論的に可能」だったとしても実際には出来ないっていっぱいあるよね。
節約して伐採やめた方が、かしこいんじゃないですか？

（井下 祥子）

・三菱商事編

この人が「地球環境室室長」の中恭即。

儲かる"環境ビジネス"

三菱商事・地球環境室室長、中恭即はいう。
「熱帯雨林再林実験プロジェクト　の採算は考えていない。」と、しかし一方では「今や一流のビジネスを行う企業は環境問題にもきちんと取り組むことが世界のビジネスパートナーから求められている。」
「ボランティアではなく、ペイするからっこそ取り組める。」と　一流の企業論理を語っている。

Ⓓ この宮脇昭という人は後ページで紹介

追伸
私共のマレーシアにおける子会社、ダイヤマレーシア社、および熱帯自然林再生実験についてのお問い合わせにつき、下記の通りお答えします。

1. ダイヤマレーシア社について
当社は1974年以降、サラワク政府との年間伐採契約に基づき、約16年間にわたり操業して来ました。　伐採に当たっては、持続的森林経営をめざし、東南アジアでは最も厳しいと言われております、マレーシア森林法等の規則を守り択伐方式をとっておりますので、決して熱帯林を破壊しているものではありません。
昨年8月ダイヤマレーシア社林区内にて、イバン族が道路封鎖を行った事は事実ですが、当社は数日間操業を停止し、じっくり話し合いを行った結果、イバン族代表は納得のうえ封鎖を解き、その後は同種封鎖事件は発生しておりません。
また、操業状態につき、1日24時間3交替制で一年中行われている様なご指摘がありますが、ご承知の通り、現地は雨が多く、雨天の日とその翌日後は道路の状態が悪く木材搬出が不可能となる為、晴天の日のみ昼夜木材搬出を行わざるを得ないわけです。もちろん、夜間は危険ですので木材の伐採は行いません。　従って、年間操業日数はその年により異なりますが、120～150 日程度となります。
なお、当社は本年3月、更新が継続されなかったことから、伐採を中止し、現在伐採許可更新につき州政府と協議しております。

2. 熱帯自然林再生実験について
この実験は横浜国立大学・宮脇教授のご指導の下、マレーシアの大学の協力を得て、従来から不可能と言われておりました、熱帯における自然林の再生実験を世界に先駆けて挑戦するもので、純粋に学術的な研究です。　従いまして、従来各地で行われて来ました早成樹種による経済植林とは全く性格を異にするものです。　私共は、現地のダイヤマレーシア社と共に、この試みに全面的に賛同し、資金面等で支援するものです。
なお、先程行われました現地予備調査では、今回の実験候補地は、現地大学の構内にある荒廃地が選定される予定で、原住民の権利があると言われている所ではない事を申し添えます。

（この手紙は、再生紙を使用しています。）

儲けてなんぼ！ 環境ビジネス

●住友商事編

七月十九日、ウータンのメンバーは、住友商事に公開質問状の返答をうかがいに出向いた。面会に応じたのは、総務部長代理の藤井広昭氏と木下憲一郎氏。藤井氏が説明にあたり、木下氏は聞き役にまわっていた。

藤井氏は、ボルネオやカリマンタンに出張が多く、何度も現地に足を運んだそうだが、目にしたのは伐採する森ばかりで現地の人々の思いに触れた様子はない。「いやぁ、何うほひどいですよ。何うの人々の生活に比べると、日本の人は不当に贅沢ですなあ。いやはや、私の息子もそうですが何を考えとるのか……。」親も何を考えてるのか、何うの人々の生活を脅かしてきたのも知らずに、日本へ木を送り続けてきたわけだから。

公開質問状に対する回答は次の通り。

一、サラワクからの原木輸入は減る見込みである。理由は、森林が減ってゆくため。

二、現地政府は、先住民の生活権を侵害しない形で、企業に伐採許可を与えていると言明している。それ以上ふみこむことは内政干渉となるが、ITTOの勧告を取り入れながらの秩序ある開発が望ましい。

三、当社は、マレーシア・ケバ州での植林再生事業を実施中。インドネシア林業試験場の報告では殆どの植林種が再生可能であり、熱帯林の植林が可能だと考えている。

四、熱帯林の破壊を防ぐには、植林による熱帯林の再生がなされる中でのバランスのとれた伐採をするべきである。

五、熱帯材の輸入が不可能であるかどうかは別として、植林木の需要が伸びてくると考えられる。

六、リサイクル（封筒の多数回利用）や、古紙再生事業に力を入れる等して取り組みたい。

尚、環境問題への取り組みに関しては、「これからの課題ということで、住友グループとして地球環境問題に対する財団を作る予定。十年計画で二百億円を拠出し、助成研究を考えているとのこと。

ウータンのメンバーからこの回答に対して質問が飛びごとに、論点をはずした答えや、よくわからない、答えられないという返答が目立つようになった。最近世界から指弾され始め対応に四苦八苦しているのでは責任ある返答も無理なのかもしれない!!。

伐採による環境破壊や先住民への人権侵害にも、その反対の声が大きくなって始めて企業の対応がなされる。これらの問題も企業側には、儲けをはばむ頭の痛い問題でしかない。住友商事に限らず、植林を始めとして環境保護を前面に押し出してこれまでの破壊を打消しにしようとしても、これらはしょせん儲け優先の商売なのだ。

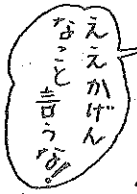
サラワクからの原木輸入が減るというのも、もう木が無くな

るからだ。植林をするというが、直径1Mの熱帯林が育つのには、おおよそ三、四百年もかかると言われている。ましてや、多種多様の木々が依存し合って成育する熱帯林の再生が可能だというのは疑わしい。少なくともそれを確かめる頃には、地球上の熱帯林は滅びているだろう。インドネシアの報告にある植林の種類や具体的な植林計画の内容又、その予算を示すように言うと、言えないということだ。まるでまやかしだ。企業には、生態系の中で生きる人間や自然の存在が促えられない。彼らにとっては、あくまでも木は資材であり、儲けるための品物なのである。企業のいう植林事業は、伐採の言い分けであり、結局は伐採用の資材作りに過ぎないのではないのか。

先住民への人権侵害についての責任を問うと「内政干渉」はできないと逃げる。サラワク州政府の環境大臣は伐採企業のオーナーで、自分の儲けのためにどんどん許可を出すという。その政府の出す伐採許可をありがたく信じる企業の論理は、無責任で便利な言いのがれだ。目先の儲けばかり優先して環境や人間の臭の悪みをないがしろにする企業の体質がいつになれば変わるのか。私達ひとりひとりが、常にその質をチェックしてゆかねばならない。

（奥村 知亜子）

三菱商事・地球環境室の目玉商品である「熱帯林再生実験プロジェクト。マレーシア・サラワク州ビンツル近くに50～100haの実験地があり、91年3月には植樹祭があるという。



●こらっ、宮脇のおっさん！あんたもよう知ってるように、フタバガキ、ラワンの木は年に1cmしか太らんし、幹が直径1メートルになるまで少なくとも300年、又種から芽が出て10cmの太さになるまで100年かかるというデーターもあるねんでー！それまであんた、この世に生きとんのかいな。

インタビュー●宮脇昭教授に聞く

――熱帯雨林については、一度破壊されたら二度と再生は不可能だ、といわれてきましたが、今回のサラワクでの実験は成功しますか？

「成功します。私の生み出した手法の発想の元は、防風など国土を守るために各地域に必ずあった、日本古来の『鎮守の森』にあるのです。つまり、国土保全を兼ねた『地域の森の緑のドラマ』をヨソの国で蹂らせよう、ということです。

この手法自体は新日本製鉄が工場の敷地内に緑地をつくった『環境の森』など、日本全国一七七か所で私が既に実証してきておりますから、成功を確信しています」

――先生は、その新日鉄など多くの企業とともに、植林に取り組まれてきていますね。

「そうです。東京電力、本田技研工業、今回の三菱商事など数多くありますが、私は本物の『緑の経営』になれる企業としか、おつきあいしないんですよ。

つまり、『緑のドラマ』のために樹本は命を賭ける。私も学者生命を賭けてやる。あなたたちも命を賭けて取り組めますか、と。すると、一〇〇人来て九八人は帰っていく。残りの二人（社）とおつきあいしてきた」

――企業とつきあうコツはありますか。

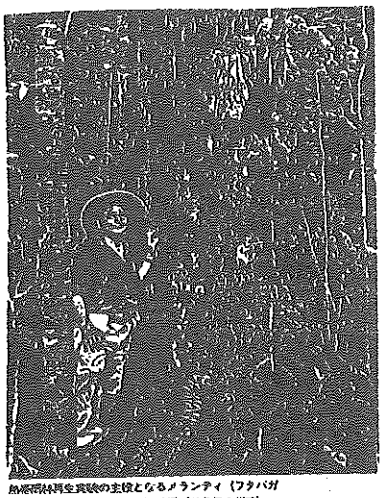
「君子の交わり、です。淡く長く、ですよ。それから『広報活動』に利用されるのは小外。とはっきり宣言し、すぐ現場に行ってもらいます。決心、知識、現場に行ってもらいます。決心、知識、実行力のある企業でなくてはこういうことはできません。

それにしても、日本では不思議と、公害問題のときもそうだが、行政が先にやらずに、産業界のトップ企業から行動を起こしていますね」

――企業が環境問題や文化活動にお金を出すとき、その企業の担当者の選球眼はどうあるべきだと考えておられますか？

「例えば文化活動でいうと、日本の音楽も分からない人が外国の曲（ミュージカルなど）が分かるわけがないというように、今、選球眼のない担当者が多い。

担当者は、厳しい状況に立たされ、やるか、やめるかという判断を下すとき、部下任せにせず、自分の五感をすべて働かせて選択、決断することが必要だと思います。とにかく、自分の足もとから地球を見ていってほしいと思います」



熱帯雨林再生実験の主役となるメランティ（フタバガキ科の樹木）の苗に立つ宮脇教授（サラワク州で）

▲月刊 Weeks '90.8月号より.

●㈱トーメン編

「熱帯林問題に関する懇談会」
中間報告
レジメ

1．懇談会の検討経過

今日，地球上の森林の約５割を占める熱帯林の大規模かつ急速な減少・劣化は，開発途上地域における経済発展に深刻な影響を与えてみならず，貴重な生物種の消滅や地，球温暖化など，地球規模の環境問題をもたらしており，熱帯林問題の克服は，全人類に共通の課題であるとの認識に立ち，これまで５回にわたる討議を行ってきた。

我々は，熱帯林問題に関する取組の方向性を発掘する観点から，開発途上国の政治・経済・社会の状況，熱帯林問題克服のため人類がとるべき行動理念（１億の地球憲章）の提唱

ウータン・森と生活を考える会他関係各会殿

1990年6月29日

㈱トーメン

広報室長

地球環境問題は、21世紀に向けて全世界的な規模での対応が求められている重要課題であると認識しております。当社としても、本年4月よりスタートさせた長期経営計画の基本経営理念の中で地球環境問題をとらえており、今後社内で協議を進め更に具体的な施策を待つべく検討する方針です。

今回ご質問のありました熱帯林問題につきましては、個々のご質問事項に対する回答は差し控えさせていただきますが、当社としては大来佐武郎先生を座長とする林野庁長官の諮問機関である「熱帯林問題に関する懇談会」の中間報告とその認識を一にしているものでございます。

ご参考迄に同中間報告のレジメの写を添付致します。

㊂「熱帯林問題に関する懇談会」委員名

座長・大来佐武郎（内外政策研究会会長）

・秋山智英（海外林業コンサルタンツ協会会長）

・内嶋善兵衛（お茶の水女子大学理学部教授）

・茅陽一（東京大学工学部教授）

・河毛二郎（経団連農政問題委員会委員長・同森林部会長）

・菊地清明（松下電気K.K顧問）

・吉良竜夫（琵琶湖研究所長）

・神足勝浩（日本熱帯林研究会参与）

・佐々木恵彦（東京大学農学部教授）

・曽野綾子（作家）

・原剛（毎日新聞社編集委員）

・松本俊弘（日本木材輸入協会会長）

南洋材商社別輸入量

丸太			製材		
会社	数量（千m³）	前年比（%）	会社	数量（千m³）	前年比（%）
丸紅	1,057	＋5.0	三菱商事	109	＋6.7
伊藤忠商事	921	＋16.2	伊藤忠商事	108	＋6.0
日商岩井	885	＋12.5	日商岩井	99	＋27.7
住友林業	859	－9.5	丸紅	74	－1.6
ユアサ産業	842	＋20.8	三井物産	64	＋21.7
ニチメン	761	－1.6	明和産業	64	－2.2
安宅木材	590	－4.3	ユアサ産業	42	＋40.8
トーメン	355	－1.9	住商ランバー	41	＋21.8
三井物産	319	＋1.6	本州木材	37	－13.1
住商ランバー	308	＋33.9	安宅木材	34	＋6.3

（注）日本木材輸入協会の資料をもとに本紙が集計
100m³以下を切り捨て

▲木材新聞 '90.2.9より

暗するに、私たちの聞きたいことには、ぜ～んぜん答える気がないというか、よう答えへんのネ。

かわりに出来あいの「中間報告・レジメ」を送ってくるなんて、レポート丸うつしの学生といっしょやなー。

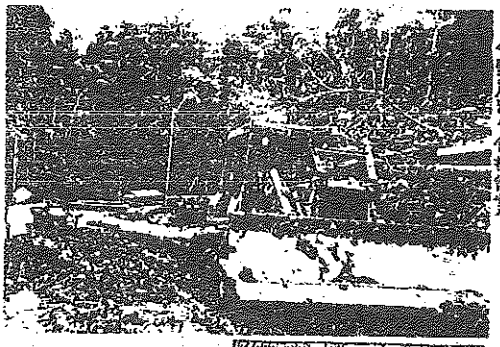
・ACTION! FAX IN!・

熱帯林をこれ以上切らせるな！
丸紅、ニチメンに抗議の嵐を！

〔南洋材輸入No1〕〔サラワク材輸入No.1〕

◉あなたの声で、熱帯林伐採をストップさせよう！

現在、地球規模であらゆる環境破壊が進んでおり、その中でも熱帯林の伐採による急速な破壊は今や深刻な問題となっています。その破壊の惨状は森を生きる糧にする先住民たちの勇気ある行動によって全世界に訴えられてきています。中でもマレーシアのサラワク州では1日24時間3交替で破壊的な森林の商業伐採が続けられており、このまま伐採が続くならあと5～6年で原生林は消えてしまうとまで言われています。これに対し先住民たちはブロッケード（伐採道路の封鎖）でもって闘い続けています。



無差別な伐採作業

熱帯材の世界最大の輸入国である私たち日本の責任は重大です。輸入される熱帯材の90%はマレーシアのサバ、サラワク州から来ています。そしてその8割以上がコンクリートパネルやカラーボックスなどの合板として使いすてられているのです。

私たちは、今日本の浪費社会を見直すとともに、彼ら先住民の叫びにこたえる為にも熱帯林の輸入に関わる日本商社に対して熱帯材の輸入の即時中止を求めていかなければなりません。

このまま先住民の生活を踏みにじりながら使いすての生活を続けていくことが許されていいのでしょうか？

先住民の生活と文化を守り、又未来の子供達の為にも地球の大事な森林を残すことが私たちの責務ではないでしょうか。

先住民たちのブロッケード

私たちウータンは、そのファースト・アクションとして、丸紅（南洋材輸入No1）とニチメン（サラワク材輸入No1）に対して下記の要領でFax IN!を行ないます。

これはできる限り多く人間が個別に各商社に抗議するほうが効果があります。

どうぞ私たちの行動に参加して下さい！

抗議先

◉ 丸紅 木材建材部
代表取締役社長 龍野富雄
Fax.(06)266-3997
Tel.(06)266-4455

◉ ニチメン 木材部
代表取締役社長 田中義己
Fax.(06)223-4500
Tel.(06)223-4491～3（4493は課長）

※ 抗議日は、7/30(月)～8/4(土)とします。上の欄に社名、社長名を記入の上、ワクの中に抗議の声をお書き下さい！「森をツブスな！」など ひと言でもケッコウです！

☆Fax IN! これからも他商社に対し行います。よろしくお願いします。

◀Fax抗議行動要請のビラ（今回は、何の返答もなかった丸紅とニチメンに7/30～8/4の期間、抗議をしました。）

ブルーノのこと

井下 祥子

熱帯林で狩猟、採取の生活をするプナン族と共に7年間――。

そのブルーノさんが伐採に追われる仲間の為に、世界をまわっている。私たちの集会にも来てくれた。会場で会った彼は物静かで、にこやかで「先住民の権利の為に日本を告発する」といった闘士めいたところはみえなかった。

運動の主旨には賛成だが、好きになれない人というのがある。告発することで検事のようにエラくなってしまう人だ。

私自身そうなりがちだ。だから、ブルーノさんのような人によけいにひかれてしまう。

プナン族と暮らす前は、2年間洞窟にいた。何でも分かち合うプナン族のあり方を彼は〝個人主義・競争社会〟の西欧文明の対極とみている。そんなことが話の中でわかった。

NHKで観た「吹き矢とブルドーザー」で彼は自分のサルが子どもをケガさせた時のエピソードを語っている。

「私がサルを殺そうとすると、その子は殺さないでくれと言った。そのやさしに私は泣いた。」（私にしたら子どもがサルの命ごいをするのはそんなに驚くほどのことじゃないように思えるが……）

「実際生活してみたら、プナン族の暮しはロマンチックじゃなくてきびしい。」と語る彼は〝とってもロマンチスト〟なのだろう。

多分、西欧文明の中で居心地の悪さを感じてとび出してしまったにせやさしきヒッピーの生き残りなんじゃないだろうか。

政治だの運動だのとは多分一番遠いところにいただろう彼が、熱帯林の破壊とマスコミの発達のおかげで集会のパンゴをしたり、お茶の間の有名人になってしまったのは皮肉なことだ。

ブルーノさんが、再び仲間のところへ戻って、心安らかに森の中を放浪できる日が来ることを、彼のために、そして彼の仲間のために祈りたい。彼らが「別の生き方」を選ぶ時までは――。

……と、オチをつけたが「彼らのため」だけでなく、「私のため」でもある。

コンクリート漬けの生活に疲れている人間にとって森があり、そこで森と共に生きる人々、生き物が存在すること――それは大きな救いだ。

体力と生活力があったら私もやりたいねんけどな――とクーラーのきいた茶店で文明人はゴタクを並べるのである。

●プナン族の危機を訴える、ブルーノ・マンサ氏(35)（6月4日 大阪市中央青年センターにて）

会員通信欄 より…

通　信　欄

いつも通信ありがとうございます。
一度くらいは集会等に寄せてもらおうと思っていながら、一度も参加できず申し訳ありません。6月4日にはぜひ、と思っていたのですが、今回もムリになってしまいました。
ところで通信を受けとっているのが「会員」ということであれば、「会員」になるので（会費2,000円とカンパ3,000円）ということになります。よくわからない人のためにもう一度説明しておきます。

▲ 八尾市：畑 健次郎さん

先日（6月4日）ブルーノ・マンサーさんを迎えた報告会を開かせていただきました。私が初めてヴァータンの存在を知ったのは二年以上も前になります。京都でのアジア市民フォーラムでした。その時は、細々とやってますとおっしゃってましたが、あれから着々と頑張っておられるのを感じています。
私何かイベントがあれば参加させていただきたく思います。
1990. 6. 22.
とりあえず、これからも頑張ってください。　太田恵栄

▲ 阿倍野区：太田恵栄さん

いつもありがとうございます。
又、外国の地球環境論でもお世話になります。近いうちに足を運びたいと思っております。いつもあちらにおられず、すみません。ただ外国では、毎週300人近い学生が、地球環境論をまきに、金5限に（4:20―6:00）あつまります。この機会を活かしたいと思います。又、外国にもいらして下さい。来年の講義にも来て下さい。
今年もよろしく。

▲ 高槻市：深尾葉子さん

おたより下さい！　待っています。

NEWS PAPER®
東京 '90.6.8

この人

熱帯林伐採による住民の生活危機を訴える
ブルーノ・マンサーさん

ボルネオ島・サラワクの原住民プナン族の伝統的な生活が、商業目的の熱帯林の伐採でいかに破壊されているかを訴えるために来日、九日午後、東京・文京区民センターで開かれるシンポジウム「サラワクの森から」で報告する。

幼いころから自然にあこがれた。現代文明から離れ「自然と一体の生活をしているプナン族の暮らしを知りたくて八四年にサラワクへ。以来四年間に知り得る限りの生活をともにした。

熱帯林の伐採により環境破壊が急速に進んでいるのは日本でもかなり認識されるようになったが、住民の生活破壊の実態まではあまり知られていない。

「食べ物を例にとると、彼らの主要なタンパク源は野生のイノシシで、それを走って追いかけて吹き矢で射とめてきたが、ジャングルに伐採された木材が倒れ、走ることができなくなり、その結果、イノシシをとらえることができなくなった。果物、薬や吹き矢の毒の原料も伐採で減ってしまい、彼らは伝統的な生活を維持できなくなっているのです」

政府からプナン族のために毎年、一定額のお金が出るが「それは彼らの生活や文化を無視したもの。彼らは伝統的な生活ができるわずかな土地を残してくれることを望んでいるのです」。

帰国後、ヨーロッパ各地でもプナン族の生活の危機を訴え、理解を得てきた。最大の熱帯林輸入国・日本が変わらなければ問題が解決しない、という。

「熱帯林が必要なら、すでに伐採したところに植林するなりして持続可能な方法でうまく生産できるはず。世界的にはそれほど大きくないサラワクの熱帯林までを手をつけて住民の生活を破壊しないでほしい」と訴える。

スイス・バーゼル出身。三十五歳。

一秒間に100個のハンバーガーが売れる！

先月、7月22日の赤旗の「ギミの食事」の欄でこんな事が載っていました。　街のいたる所にファストフードの店がある中、ハンバーガーで有名なM社（マクドナルド）は、'71年東京・銀座でオープン、以降年々売上をのばし今年は年間1839億円を予想する急成長企業に。7月8日には、国内713店の売上高が9億5203万円に達し、一日としての売上高記録を更新した。

ハンバーガーの個数にして約453万個、全国の店で一秒間に約100個のハンバーガーが売れたことになる。　たいへんな数である。

「安あがり、かっこいい！」と人気があるハンバーグ、日本の食生活の崩壊とハンバーグの肉がアマゾンの森を破壊してでもに牧場からきているかも知れないことを一対誰が知ろうか――。　Ⓝ

ウータン熱帯スケジュール

H・U・T・A・N　SCHEDULE

SAVE OUR FOREST

■9月16日(日)・月例会

学習会「熱帯林の生態について」

講演：　桜辺　弘之氏

（京都大学農学部助教授　熱帯林生態学）

1:00PMより～

大阪市中央青年センター

（JR森ノ宮下車、西へ5分）

Tel. 06(943)5821

。

■9月　大台ケ原ツアー（予定）

「原生林のドライブ・ウェイなどによる破壊」

。

■10月7日(日)　大阪市中央青年センター

「サラワク報告会」パート3（1:00より）

。

■11月中　サラワク住民　来日！（予定）

。

☆多くの方の参加を待っております。

●第2期 第2回

大阪反原発講座において、『熱帯雨林を破壊しているのは誰か、その深刻な実態』という講座が開かれました。6月30日(土)

（芦原橋・総合福祉センターにて、参加者79名）

今回、反原発講座講師団の方より、反原発運動の一環として、地球環境を守る立場にたち「熱帯林破壊の問題」を取りあげるということで、ウータンに要請がありました。当日は、雨にもかかわらず多くの熱心な参加者があり、こちらで用意したサラワクの熱帯林伐採の現場、先住民の生活、伝統的焼畑の様子をとったビデオをもとに報告させてもらいました。私たちウータンも反原発運動をはじめとする諸運動と交流を深め、連帯し現在とどまるところをしらない環境破壊と、その中で迫害をうけている現地住民の為に、大量資源浪費国日本と、それをささえる独占資本に対する斗いを強めていかなければならないと考えています。　Ⓝ

編集後記

三月の後半あたりから、ウータンに参加しはじめ、なにがなんだかわからぬまま、今号の「ウータン」の編集するはめになってしまいました。　なにしろ、スタッフの慢性的な少なさがいろいろな支障をきたしているのが現状です。

さて、私の仕事は「家具作り」でして、いやがおうでも木と接しています。　そんなことで熱帯林破壊の問題に興味を抱き今日に至るといった訳です。

「熱帯林のこと、何も知らないから―。」と思わずに―、私たちも動きながら熱帯林のことを勉強していこうと思っています。

とりあえず、Let's Action!!

私たちの仲間になって下さい。〈永田健一〉

。「ウータン定例会」は毎月第2と第4火曜日・7時より行っています。

場所は、表紙の連合事ム所です。

（地下鉄谷町線・中崎町下車2分）

問い合せ　西田良夫　0722(52)0505

永田健一　0720(81)4939（夜間）